

Seneca のレジャー観をめぐって

松田 義幸

On Seneca's dimension of leisure

Yoshiyuki MATSUDA

Seneca is the most important philosopher on leisure studies. It is said that his viewpoints for leisure are written in the works of "On the Shortness of Life", "On Tranquillity", "On Leisure" and "Letters". But for some reasons, the study of Seneca's works seems to be less popular in Japan than in western world, to say nothing of the study focused on Seneca's philosophy of leisure.

So it is the aim of this essay to make review what the Seneca's philosophy of leisure is and, also what the philosophy tells us to think about the meaning of leisure toward our learning society.

Key words : otium, negotium, contemplatio

1. はじめに

「あらゆる人々の中で、ゆっくり思索をする時間のある人だけが、レジャーのある人であり、そのような人だけが、真に生きている人である。」¹⁾

Seneca (Lucius Annaeus Seneca BC4-AD65) は、スペインのコルドバの裕福な家を出自とし、ローマにおいて、修辞学、弁論術、哲学を学び、皇帝ネロの時代に、最も重要な政治家として、また文筆家として活躍した。彼は、富貴、名声、権力を手中にした人であるから、したたかな人であったことには間違いない。自らもそのことを反省している²⁾。しかし、彼の思索生活になると、世俗の生活と違って、驚くほど自己抑制的である。この言行不一致に対し、手厳しい批判もあるが、名文としての数々の著作は、後世に大きな影響を与えてきた。

例えば、Dante, Chaucer, Petrarch は、彼の自然研究を高く評価し、多くを彼の著作から引用している。印刷ができてからは、急速にその影響が広がり、Erasmus は1515年に、Calvin は1532年に、彼の著作の編集にあたっている。また、Montaigne は、Seneca の影響を最も受けた人ではないかといわれている。Pasquier は、「Montaigne

はフランスの Seneca」と述べている。さらに、影響を受けた人としては、John & Salisbury, Emerson, Decartes, Corneille, La Fontaine, Poussin, Rousseau, Diderot, Balzac, Sainte-Beuve などがいる³⁾。

彼の影響は、自然研究、哲学、思想、文学、エッセイ、ドラマと、多岐にわたっているが、近年、レジャー論としても関心を集めている。その契機をつくったのは、Sebastian de Grazia である。1962年に、Of Time, Work and Leisure を著し、その中で、Aristotle と Seneca のレジャー観を、The Background of Leisure としてとりあげている⁴⁾。

Seneca は、ストア派に属していたけれども、他方、エピクロス派にも深い理解を示し、この2つの派の思想を調和させる生き方を探っていた。まず、Seneca は、レジャーについてよく思索した後、「人生の短さについて」⁵⁾のエッセイを書き上げた。この主題は、真の生き方としての哲学的精神の追求である。仕事 (negotium) から自由になり、レジャー (otium) を十分とり、哲学的精神を大切にすれば、人生は決して短くはない。過去によく生きた賢者たちの著作にふれ、「いかに生きる

べきか。またいかに死すべきか。」について学べば、人生の短さを克服することができる。人は、よく人生は短すぎると嘆くけれども、それはレジャーについて無知であるからだ。

Seneca は、この後にもさらにレジャーについての思索を続け、「心の平静について」(De Tranquillitate Animi)、「レジャーについて」(De Otio)、「書簡集」(De Littera) をまとめている。Sebastian de Grazia は、これらのエッセイをレビューし、「心の平静について」は、レジャー論の序章、「レジャーについて」は、その哲学的考察、「書簡集」は、レジャー生活の実際、と位置づけている。

本論は、Seneca の上記関連文献と、ラテン語と英語の対訳の Harvard-Heinemann の Loeb Classic Library の Seneca Series、岩波文庫の茂手木元蔵訳^{註3)}を参考にしながら、Seneca のレジャー観をレビューし、その後で、今日的意義について考察を加えた。なおわが国においては、まだ Seneca のレジャー論は体系的に紹介されていない^{註2)}。そこで、本論は Seneca のレジャー論を、Sebastian de Grazia の考えに沿い、詳しく紹介してみた。また「レジャーについて」はまだわが国において翻訳がないので、このエッセイについては、できるだけ詳しく、紹介することにした。

2. 人生の短さについて (De Brevitate vila) ^{註4)}

人は誰も人生のあまりの短さを嘆く。「しかし、私たちの人生は短いものではない。その人生の多くを、浪費しているのである。人生は十分長く、もしも、生涯の時間を上手に使うならば、私たちはどんなことでも成し遂げることのできる十分な時間を与えられているのだ。しかし、その時間が放蕩やぞんざいに使われたり、また、よくない目的に使われたりするために、最後に本当に必要になったときに、まだあると思っていた時間が、とっくになくなっていることを知る。」(1-2)

どんなにお金や財産に慎重な人でも、こと時間の使い方ということになると、たちまち浪費家になってしまう。だから、ここで自分のこれまでの生活時間がどんなことに使われてきたか、残されている人生、生活時間が、どんなことに使われようとしているのかを、計算してみると、自分自身のための時間が、あまりに少ないことに驚く。例えば、どれだけ時間をつまらない人間関係の

ために使ったか。また、必要以上の富貴、名声、権力を手に入れるために使ったか。そして、自由時間までも、どれだけ放蕩や怠慢に使ったか。これをざっと計算してみただけでも、自分の人生を充実させるための時間が、なんと少ないかに驚く。

それなのに、人はよく50歳になったら、レジャー生活に入ろうと考える。しかし、レジャー生活に、それから入っても、充実したレジャー生活は、そう簡単にできるものではない。富貴、名声、権力を窮めた人たちが、レジャーに憧れ、讚え、そして、レジャーはなによりもまさる幸福だと口にする。というのは、貴富、名声、権力は、世俗的なもので、それを手にいれた人たちは、外からの攻撃を受けたり破壊されたりすることがなくても、いずれがらがら崩れることをよく知っているからである。しかし、このことをよく知っていながら、いざ現実の問題となると、その富貴、名声、権力から自由になることができずに、逆にそれらに執着し、ますます多忙な人生になってしまう。

とかく、多忙な人生を送っている人は、過去を忘れ、現在を無視し、未来を恐れていることが多い。あのギリシャ的教育を身につけ、多才と雄弁とで知られていた Cicero ですら、人生のツキから見放されると、

「あなたは、私がここで何をしているのか お尋ねのようですが、私はここトウスクルム (ローマ東南15マイルにあるラティムの町) の別荘で、半ば幽閉されているように、だらだらと時間を過ごしております」(5-2)

と嘆き、過去を後悔し、現在に不満を述べ、未来に絶望している。賢者といわれた Cicero は、こんな弱音を吐くべきではない。「人生は十分に長い」と捉えるには、過去を回想し、現在を活用し、未来に希望を持つことである。それによって、私たちは、生物的生命の何倍もの人生を生きることができる。

ここで過去を回想するということは、単に自分自身の過去だけではなく、過去によく生きた人々の人生もさしている。私たちは、自分の人生に、Aristotle, Epicurus, Zeno といった、賢く生きた人たちの人生をつけ加えることができる。

こういう人たちは、後世の私たちが、人間として完成に向かうために、生きてくれた人たちであり、私たちに様々な生き方を教えてくれる。私たちは、その気になって努力さえすれば、どの人の

養子にも、弟子になることもでき、こうした賢者たちとの心の交流を通じて、富貴、名声、権力以上の本当の幸福を手に入れることができる。

これからの賢者の養子になりたいと願って、彼らの家を探ねると、いつも歓迎してくれる。いつも待っていてくれる。誰一人留守で家を開けているということはない。そして、訪ねる人を、幸福に生きるよう動機づけてくれ、手ぶらで帰すことはない。心から親しくつきあってくれる。しかも、だからといって、とがめられることも、金銭も必要としない。大きな問題にも、小さな問題にも、また一身上の問題にも、こちらから丁寧に、誠実に尋ねれば、いつも適切なアドバイスを与えてくれる。

人は親子の関係を自由に選ぶことはできないが、賢者の養子ならば、それを望み、努力さえすれば、自由に選ぶことができる。しかも複数の養子になることもできる。モノの財産を継ごうとすると、どうしても、汚く、けちけちすることになってしまうが、賢者の心の財産を継ごうとすると、心のゆとりができ、多くの人たちに分け与えたいと思うようになる。

この世で永遠の価値のあるものは、賢者の英知である。賢者の英知は誰からも嫉妬されることなく尊敬される。賢者の英知は、あらゆる理由から自由であり続けることができる。従って、レジャーを大切に、この英知と交流することが、なにもまして幸福なことである。

もしも、私たちがこういう生き方をとるならば、世俗のあらゆる利益、時間、空間の制約から自由になることができる。それによって人間は死ぬべき運命にあるという意識を、永遠であるという意識に、変えることもできる。このようにして得た心の財産は、物の財産と違って、取られたり、失ったりすることはない。

(以上が、「人生の短さについて」の大意である。わが国では岩波文庫訳があることもあって、このエッセイが一番よく読まれている。)

3. 心の平静について (De Tranquillitate Animi) ^{#5)}

「心は常に平坦で順調な道を進み、おのれ自身に親しみ、おのれの状態を喜んで眺め、しかもこの喜びを中断することなく、常に静かな状況に留まり、決しておのれを高めも低めもしないことで

ある。これが心の平静ということであろう。」(2-4)

これがギリシャ人が *euthymia* (Well-being of the soul) と呼んでいたところの「心の平静」である。ところが、この「心の平静」に達するということは、非常に難しい。それは、人間が二つの悪徳から、自由になれないからである。その悪徳とは、軽薄さと強情さである。軽薄は堪えることをできなくし、強情は変わることをできなくしてしまう。いかにして、心を自己に戻すか。それは、「心が自らを信じ、自らに喜び、自らのものを尊び、できる限り他人ごとから退いて自分を自らにささげ、損害を感じることなく、敵側のことでも好意をもって考えるようにするのがよい」(14-3)

Zeno は、自分の財産をのせた船が難破した時に、「運命の女神が私に命じて、今までよりも束縛を受けることなく哲学を学ばせるのだ」(14-3) といったという。

Diogenes (シノベのディオゲネス BC404-323 禁欲生活や反社会的態度を本領としたキュニコス派に属した人) は、自分の奴隷が逃亡し、その居所がわかった時に、「恥かしいことだ。奴隷の Manes は Diogenes がいなくても生きられるのに、Diogenes は Manes がいなくては生きられないとは」(8-7) と嘆いたという。

「人間の生活がどんなに崇高であっても、苛酷であっても、結局人間は無から生まれて無に帰するという考え方以上に出るものではない」(15-4)

Zeno や Diogenes のように富貴、名声、権力から、自由になるということは難しいが、しかし、それから自由になろうと心がけることは大切なことである。富貴、名声、権力に執着しなければ、それだけ早く「心の平静」に達することができる。

「食物は飢を押さえるほどにし、飲料は渴きをいやすほどにし、欲情は必要欠くべからざる限度に発散しよう。学ぶべきは、おのれの手足に頼ることであり、また衣食を当世風に合わせるのではなく、父祖の慣習の勧めに應ずることである。さらには、節制を強め、ぜいたくを抑え、名誉欲を差し控え、怒気を和らげ、貧困をながめるのに公正な眼を用い、質素を培い、たとえ多くの人は恥じようとも、それにもかかわらず、自然の欲求には、安価に得られるものを当てて、いやすことである」(9-2)

「心の平静」に達する一番よい方法は、休養をとり、娯楽をとり、そしてできるだけ哲学的精神を大切に、学問をすることである。レジャー生活と仕事生活をバランスさせることである。一度も休耕しないで収穫をあげ続けることはできない。そういうことをしたら不毛になってしまう。人間も休養をとらずに働き続ければ活力をくじくことになる。いつか無気力と倦怠観に陥るだろう。気晴らし、娯楽をとることも大切なことである。Socratesは幼児と戯れることを楽しんだし、Cato (BC234—149ローマの政治家、軍人、文人)は公務の疲れを酒で和らげていた。Scipio (BC237 or 234—183ハンニバルをザマで破ったローマの將軍)は音楽と自らも踊りを楽しんだ。

心には適当に休養、気晴らし、娯楽がいる。野外を散歩して、心を自然に委ねるのもよい。時には乗馬や旅行で、気分転換、気晴らしをするのもよい。仲間と会食し、時にめいていするのもよい。溺れてはならないが、酒は憂を洗い流し、心の悲しみをいやしてくれる。酒神を解放神 Bacchusと呼ぶのは、憂いから心を解放し、あらゆる試みに動機づけてくれるからである。このように、時には、心を娯楽や自由のなかに連れ出すことが大切である。ギリシャの詩人たちのように「時には狂乱することも楽しい。なにか崇高な、他をしのぐような言葉を発するには、心に感動がない限り不可能である。」(17—10)

そして、「心の平静」の状態で楽しむべきは、よく学問をし教養を身につけることである。仕事の世界は危険な航海に満ちているから、港を求めて、自分自身をそこで自由にすることである。大切なことは、まず自分自身であり、次に仕事であり、それから仕事の相手、仕事の仲間である。であるから今までよりも多くのレジャーを求め、学問をすることである。

ところで、学問をするというと、それは書物と蔵書を充実することだと考える人がいる。それでは、いつか、学問研究のためにではなく、水風呂や湯殿に混じって、書齋も家の飾りと思う人まで出てくる。しかし、いくら蔵書を充実しても、それがぜいたくのためであってはならない。そのような本の山は、学習者にとって重荷になって、参考にはならない。それよりも、これはよいと思う数人の著者に身を委ねる方が、多数の著者の間をさ迷うよりも、賢い学問の楽しみ方といえよう。

4. レジャーについて (De Otio) ^{註6)}

私たちは有益なこと以外に、なにもしようとしていないが、隠退し閑居することは、私たちにとって望ましいことである。私たちは閑居することで高められるからである。私たちが良書と交わることができるのも、また自分の人生を方向づける手本を探し出せるのも、思うにレジャーにおいてである。

私たちが、以前に、これはやっておこうと決めたことを、本当にやれるのは、レジャーにおいてである。そこには邪魔なものが入ってこないし、大勢の仲間がやってきてやめさせるということもない。日常生活では、とにかく様々な仕事に振り回されるが、レジャーにおいては、自分が本当にやりたいと思うことに、真直ぐ、むらなく進んでいくことができる。それなのに、私たちは、快樂までも移ろぎで次から次へと変えてしまう。探していたものを諦めて、諦めていたものをまた探し出す。いつもこのように欲望と後悔の間で迷っているのである。私たちは、レジャーを通して、しっかりとした自分を持っていないので、とにかく他人の判断に左右されやすい。それが間違っているとわかっていても、皆がそれがよいという、自分までそれに従ってしまう。

Senecaはこのようにレジャーの重要性を説くが、ストア派の仲間は、なかなか理解してくれない。ストア派の仲間は、なによりも、世俗の公的生活に役立つことが、大切だと考えているからである。そこで Seneca に質問する。

「Seneca、あなたはなにをているのか。あなたは、自分のストア派を見捨てようとしているのではないか。私たちは、人生の本当の目的のために、仕事をしているのだ。私たちは公共の利益のために、仕事をしているのだ。個人のため、皆のため、そして時には、敵に手を差し出す場合だってありうる。私たちは年をとったからといって、公的生活から隠退しようとは思わない。

白髪の上になお指導的位置を保つ。

まさにこれが理想である。従って、死の前にレジャーをとることなど、ありえないことだ。もしも状況が許すならば、私たちは、死それ自身のためにもレジャーをとろうとは思わない」(1—4)

そのために、Senecaは仲間から批判を受ける。

「なぜ、ゼノンの本拠地で、エピクロスの教えを説くのか。もしも、自分の派にうんざりしてい

るのであれば、なぜ、裏切るよりも前に、派を出ようとしなのか」(1-5)

しかし、Senecaは、自分はストア派の教えに背いているのではないと反論する。若い時からでも、真のコンテンプレーション(観想)²⁷に自分自身を委ね、人生のあり方を探ることは大切であるし、また公的生活を退き、コンテンプレーションを大切に生活することも意義のあることなのである。

エピクロス派は、

「賢者は非常時でない限り、公的生活には就かないものだ」

ととらえているのに対し、ストア派は、

「賢者は、防げるものがなければ、公的生活には就くものだ」

ととらえている。このどちらかをとるか、それは難しい問題であるが、賢者であるならば、国が手のほどこしようがないくらい荒廃し、混乱しているときには、あえてその中に首を突っ込み、公的生活に就かない方がよい。そのような時には、閑居して、学問に専心し、徳性を高めるようにした方がよい。そのようにしていれば、いずれ公的生活に就く必要が生じたときに、前よりも上手に対応できるからである。

公的生活との関わり方には、二つのタイプがある。一つは一般的な意味でいうところの国家をとりあげて、国家はいかにあるべきかを問題にする。もう一つは、具体的民族のための国家、例えば、アテネ人のための都市国家、カルタゴ人のための都市国家をとりあげて、いかにあるべきかを問題にする。ところでレジャーとの関係でいえば、前者のタイプとのつながりが深い。というのは、レジャーでよくとらえたことを、国家が実現(公的生活において)しなければならないからである。

徳とはなんであるか

徳とは一つなのか、多数なのか

徳とは人を美に導く性質を有するのか

また技術なのか

海と土地と

さらにそこに包含されている

諸々のものからなる世界は

単一の創造物であるのか

それとも

神は同じ種類の多くのシステムを

あちこちにまき散らしたのであるのか

神はこの世界をぼんやり見つめているのか

あるいは指図しているのか

神はこの世界を取り囲んでいるのか

また世界は永遠なのか

滅び行くものなのか

ただ束の間の生命なのか

こういう本質的な問いかけに対しては、レジャーにおいて、ゆっくり思索することが望ましい。

具体的なアテネの都市国家、カルタゴの都市国家ということになると、直面し、やらなければならないことが山積みしているの、こういう本質的な問題を、考えるゆとりがなかなかできないのである。従って、実務にある人においても、仕事から離れコンテンプレーションとレジャーの生活が大切なのである。

自然は人間にコンテンプレーション(観想)と行為の二つを与えたといってもよい。ここで、コンテンプレーションはレジャーをさし、行為(実務)はこのコンテンプレーションを前提にしなければならない。物事の本質をとらえるのは、コンテンプレーションであり、コンテンプレーションなしにただ忙しく行為し続けると、ものごとの本質を見失ってしまう。だから大切なことは、まず生活の基本にコンテンプレーションをおくことである。

私たち人間は、未知の世界に対し、大いなる関心を抱いている。ただそれだけのためにある者は航海をし、なにか発見しようと、苦しみにも耐える。私たちは閉じられているものを覗き、隠されているものを探し、過去を明らかにし、知らない種族の慣習に好奇心を持つ。自然は私たち人間に、このような知りたがりやの性質を与えた。さらに、自然自身の技と美に、関心を向けさせるようにした。自然は、神々しく、巧みに創造されており、それだけに、人間を単に見物人としてだけではなく、その中心におき、宇宙を見渡し、宇宙にあきることのない関心を持ち続けさせた。

自然は、私たち人間を、単に直立できるように創造したのではない。自然自身のもくろみに合うように、体のでっぺんに頭をつけ、自由自在にまわるように首をつけ、世界、宇宙を見渡せるようにしたのである。しかし、それにしても、こんな

にいろいろのことに関心を持たなければならないのだとしたら、確かに私たち人間には、時間がなさ過ぎる。いくら時間を大切にしても、人間は死すべき運命にあり、結局は、すべてが永遠であると理解することができない。だからこそ、自然に自分自身をすっかり引き渡し、自然の崇拜者になり、自然にしたがって生きようということになるのである。その時に、自然は、私たち人間がコンテンプレーションと行為の二つを基本にするように、こしらえたということを忘れてはならない。というのは、私たちの行為は、コンテンプレーションを大切に生活した生活を前提においた時に、最も自然であるからである。コンテンプレーションというと、実益がなく、単に楽しみのものでないかと批判する人がいる。しかし、同じことは、公的生活についてもいえるわけである。公的生活はいつも忙しく、とても、人間の本質や、宇宙まで、気をまわすことはできない。徳を大切にすることなく、自己を開発することもなく、富貴を求め、仕事にのみ関心を示すということは、決して人に勧められるものではない。従って、公的生活は、コンテンプレーション、レジャーを前提におくべきなのである。徳もまたコンテンプレーションと行為の両方に結びついていなければならない。徳は行為によって、試されるべきであり、単になにかをすべきかを考えるだけでなく、時には応用され、徳の世界が実現されるべきだからである。

賢者は、後の世代に資することを考えるべきである。賢者は、具体的な公的生活、軍の指揮、公的な役職、法律の作成といったことに、携わる以上のことをしている。というのは、彼らの考えた法律というのは、一つのある特定の国家のためのもではなく、全人類のためのものであるからである。彼らは、財産を持ち公的地位に就いたわけではないが、怠惰な生活を送らなかつた。彼らは、自分自身のレジャーを、人々のためになることに向けたのである。さらに考えてみると、人生には三つの生き方があるように思う。快樂、コンテンプレーション、行為の三つである。この三つの中で、どれが一番よい生き方であるか。それを決めることは難しい。しかし、これもよく考えてみると、快樂に重きをおいている人でも、コンテンプレーションを大切にしていないわけではないし、逆に、快樂なしのコンテンプレーションに没入する人もいないだろう。このようなことは、コンテ

ンプレーションと行為の関係についてもいえる。結局は一方が他方なくてはありえないということである。そして中でも、コンテンプレーションは、どの生き方とも深く関わっている。

5. Seneca のレジャー哲学の今日的意義

古代ローマの指導者の中で、Seneca のようにレジャーの意義をよく認識していた人は、稀であったといえよう。Sebastian de Grazia はこの点について、次にあげているような興味深い解説を与えている⁴⁾。

古代ローマでは、征服や都市づくりにあてる時間が、レジャーより優先していた。そのために、例えば、Cato は、生産力、成長力、勤勉の価値を重視し、晴耕雨読ではなく、雨の日でも、仕事を義務づけていた。また、Cicero は、ギリシア哲学をラテン世界に紹介した人として知られているが、レジャーについては、あまりよく理解していなかった。Cicero は、仕事の疲れを回復する休息、休養の重要性は認めていたが、自らは、レジャーを楽しむのではなく、レジャーを希求することにより、心にゆとりを感じるというものであった。Pliny (ローマの博物学者、百科事典編集者、著述家) も、レジャーに関心を寄せる人ではあったが、観念的なものであった。落ち着いて反省する、自然の魅力にふれる、研究、狩猟を楽しむ、都市の雑踏から離れ、気晴らしと自由を楽しむ、自然生活を楽しむ。彼はこういうことを思い浮かべて楽しむだけであった。同じように、Martial (スペイン生まれのローマの風刺詩人) も、海辺への閑居、砂浜の家、森、湖、こうした環境にいと、ミューズの女神たちと会っているような気がしてくるだろうと考えていた。しかし、現実には、Cicero にしても、Pliny にしても、Martial にしても、都市生活の雑踏に追われ、とてもそのようなゆとりを持つことはできなかった。

もちろん、古代ローマの一般の市民の自由時間の過ごし方は、「パンとサーカス」に象徴されるように、Seneca の考えるレジャー観からはほど遠いものであったといえよう。Seneca の生きた時代のローマ社会は、一般的に歴史書に沿って見るならば、むしろ異常と狂気の社会ですらあった。ところが、こうした中であって、だからこそ Seneca には、レジャーの本質がよくみえたのかも知れない。自由時間をつくり、休息や、気晴らし、娯楽の次

元で過ごしている人は、まだレジャーの真の意義を理解しているとはいえない。Seneca は、異常と狂気の世界の中で、「レジャーとはなにか」「レジャーはいかにあるべきか」を考えた結果、自らはストア派に属していながら、エピクロス派に近い立場をとるようになった。そして、真にレジャーを大切にすることは、コンテンプレーションの心の状態で、ゆっくり思索する時間のある人である、と考えるようになった。

後に、この Seneca のレジャー観は、2 世紀から 6 世紀のストア派の思想に、強い影響を与えたといわれている。キリスト教から異教に改宗した皇帝として知られている Julian は、「レジャーとコンテンプレーションの生活を意味する思索的生活は、なによりも大切なことである。もしも、それよりも大切な生活があると主張する人は、みな我々を欺こうとしているのだ」⁵⁾と述べている。

ところが、ヨーロッパの中世社会において、カトリックが支配的になってくると、Seneca のレジャー観は、そのまま継承されなかった。カトリックの修道院は、レジャー観の中からコンテンプレーション (theoria, contemplatio) の考え方を取り出し、観想的生活 (contemplative life) を重視するようになった。修道院生活は労働と祈りを基調とする。この祈りは観想的生活において行われる。このために、古典的なレジャー観にみられるミューズの女神たちとの祝祭、リベラル・アーツとの関係を弱めてしまった。また切り離してしまった。一方、中世において、大学が設立されるようになると、リベラル・アーツは、大学のカリキュラムの中に組み込まれ、人々の日々のレジャー生活から、この方も離れてしまった。Seneca のレジャー観にみられるように、思索生活 (レジャー生活) とコンテンプレーションは、具体的な人々の日々の生き方にとって重要なものであって、修道院、大学の中で、それが受け継がればよいというものではなかった。Seneca のレジャー観は、指導者の生き方はいかにあるべきかという視点からとらえられてはいるが、この考え方は、Seneca の思索的生活を、あの古代ギリシアの時代のリベラル・アーツの世界まで拡張すれば、人間の自由時間の過ごし方として、一般化することができよう。今日的な関係でいうところの仕事とレジャーの本質的な関係を、よくとらえた考え方といえるからである⁶⁾。

すでに「レジャーについて」でみてきたように、Seneca はストア派に属しているが、仕事に力点をおくストア的態度とレジャーに力点をおくエピクロスの態度を、いかに調和させるか、これが彼にとっての課題であった。仕事とレジャーのバランスをとることの難しさは、なにも今に始まったことではなく、昔からのことなのである。

今日の私たちが古典的レジャー観からなにを学ぶべきか。Sebastian de Grazia は、そのために古代ギリシア、古代ローマから、Aristotle と Seneca を取りあげ、レジャーの普遍的価値を探っている。この Grazia の研究成果を水先案内人として、もう一度、原典にあたりながら、レビューしてみた私の感想は、次のようなものである。Seneca が、Aristotle をレジャー問題からどれくらいとらえていたか、それはわからないが、両者のレジャーについての思索内容を比較してみると、大いに重なっているように思える。それは二人の言葉使いによく現れていると思うからである。Aristotle と Seneca の Harvard-Heinemann の Loeb Classical Library の対訳を参考に Greeks → English A, Latin → English B,

English A ⇄ English B といった関連、比較を行いながら、また Sebastian de Grazia, Josef Pieper の用語の使い方を参考にしながら、少し、細かな記述になるが、いくつか、比較してみたい。

ラテン語の otium に原則として、leisure があてられており、否定形の negotium に work があてられている。これはギリシア語の scholē と、その否定形の ascholia に対応している。

scholē → otium → leisure

ascholia → negotium → work, business (negotiation)

Loeb Classical Library では、otium に、時に、play もあてられているが、play には ludus が使われている。

contemplatio は、contemplation であるが、ギリシア語では theoria が使われている。

theoria-contemplatio-contemplation

また自由時間の過ごし方として、Aristotle は、anapausis (rest, recreation, relaxation) paidia (amusement, entertainment), scholē (leisure) の三つのタイプをあげたが、Seneca も、ほぼ同じ三タイプを考えている。

anapausis に対応するものとしては、remissio

(relaxation)があり, paidia に対応するものとしては, resolutio (release)がある。そして, schole には, leisure があてられているが, Seneca も一般的には otium を使いながらも, 具体的な生き方を表現するときには, それを sapientia (philosophy), studium (study) を使っている。このために, Seneca の具体的なレジャー生活のイメージは, 思索生活を中心としたものになっている。しかし, それは指導者向けのレジャー観としてとらえられているのであるから, 今日的に解釈するには, 思索的生活を, レジャー, 文化の諸活動を一般にまで広げてとらえればよいと思う。

anapausis-remissio-recreation, relaxation
paidia-resolutio-amusement, release
schole-sapientia, studium, otium-leisure philosophy, study

Seneca のレジャー観が, 今日の私たちに今なおなにもゆえに, こうも説得的であるのだろうか。最後に, この問題について考えてみたい。

Seneca は, カリグラから, クラディウス, ネロの皇帝の時代に生きた人である。この時代がどれくらい異常で狂気な社会であったか, I. Montanelli の「ローマの歴史」を垣間見ると, いずれも, 腰を抜かすようなことの連続である。

カリグラは, 精神病と診断しなければ説明のつかない異常なふるまいの連続であったし, クラウディウスは好色で毒茸料理の策略にかかり, 死を早めるということであった。そしてネロは今日まで暴君として名をとどめている。この異常で狂気の時代に生きた人であるから, Seneca は自分自身, 随分と悪の深みにはまったものだと, つくづく述懐している。Seneca はこうした悪の深みから自由になるために, 日々, 少しでも, 自分の欠点を取り除き自分の過失に反省を加えたいと願っていた。しかし皇帝の側近として活躍し, 自らも富貴, 名声, 権力を手にいれた人であるから, Seneca の人生観は言行不一致だと非難する人も少なくなかった⁹⁾。特に言行一致に価値をおくわが国で, Seneca 人気がないのも, こういうところに起因しているのかも知れない。しかし, すべてを手に入れてみて, それが真の生き方ではない。真の生き方はもっと別のところにある。それはコンテンプレーションと思索生活 (レジャー生活) にある, 私にはこう考えたのは本音であったと思われる。本音であったからこそ, 今日の私たちにも, 時代

を越えて説得的なのだと思う。Seneca のように, 若い時から, 思索を大切にしてきた人にとって, 異常とか狂気という社会は, 逆に, 人間, 社会, 自然の本質を直観し, 思索するまたとない機会であったのだろう。

古代ローマは, 文化的に不毛であったともいわれるが, こうした不毛な中で, Seneca の目に映った世界は, 人間, 社会, 自然の本質を思索するまたとない実験機会, 研究機会であったのではないだろうか。あの異常で狂気のヒットラーの時代に, 生きた学者たちの中から, 人文, 社会, 自然の科学の世界で, よい仕事をした人が多いように。

このようにみえてくると私たちは, 生涯学習, 学習社会に向けて, Seneca のレジャー観から学ぶべきことが, はかり知れないと思う。これが本論をまとめた私の感想である⁹⁾。

注

- 注 1) Sebastian de Grazia The Background of Leisure "Of Time, Work and Leisure PP11-25 New York The Twentieth Century Fund, 1962
- 注 2) 50年前後にローマで書かれたものといわれている。茂手木元蔵訳「人生の短さについて」岩波文庫 解説編 p. 225
- 注 3) わが国では岩波文庫から茂手木元蔵訳で、「人生の短さについて」(他二篇), 「怒りについて」(他二篇) が出版されている。
- 注 4) 岩波文庫 茂手木元蔵訳と Harvard-Heinemann の対訳の「人生の短さについて」「On The Shortness of Life」を参考にして, まとめてみた。直接引用した箇所については, 「」書きにし, 引用位置を示しておいた。
- 注 5) 注 4 と同じ方法をとった。「心の平静について」「On Tranquillity」
- 注 6) 本節は Harvard-Heinemann 対訳の「On leisure」の要約である。直接引用した箇所については「」書きにし, 引用位置を示しておいた。
- 注 7) Seneca のコンテンプレーションも, Aristotle の theoria と同じ意味に使っているとみてよいだろう。今日の英語訳において, theoria → contemplation, contemplation → contemplation となっている。その内容については, 前節の「心の平静について」及び筑波大学体育科学系紀要 vol. 12 現代レジャー論(3)に詳しい。
- 注 8) この項の考え方は, Josef Pieper の「Leisure」, Sebastian de Grazia の「The background of Leisure」, 稲垣良典著「恵みの時」

(東京創元社) 佐藤敏夫「レジャーの神学」(新
教出版社)の文献と、余暇開発センターのヨゼ
フ・ピーパー研究会での成果を参考に要約した
ものである。このような見解に異論もあるか
と思うが、1つの見解としてとらえていただき
たい。

注9) 本論は余暇開発センター発行の機関誌「ロ
アジュール」1988年7月、8月号に掲載したエ
ッセイを参考に、大幅に紀要論文向きに書き
改めたものである。

引用文献

- 1) Seneca (John W. Basore) Moral Essay
Harvard-Heinemann; On the shortness of life p.
333 1979
- 2) セネカ(茂手木元蔵訳)「幸福な人生について」(2
— 3) (17— 3) 岩波文庫1980
- 3) Robin Campbell; Seneca Letters from a stoic,
introduction Seneca's life pp. 24-26 Penguin
Classics 1969
- 4) Sebastian de Grazia "Of Time, Work and
Leisure" pp. 22-23 New York The Twentieth
Century Fund, 1962
- 5) 5) に同じ文献の p. 23
- 6) 高津春繁, 齊藤忍編 ギリシャ・ローマ 古典文
学案内 岩波文庫 p. 193, p. 106, 1963

参考文献

- 1) Seneca (John W. Basore); Moral Essay II
Harvard-Heinemann Loeb Classic Library,
1979.
- 2) セネカ(茂手木元蔵訳)「人生の短さについて」岩
波文庫 1980
- 3) セネカ(茂手木元蔵訳)「怒りについて」岩波文庫
1980
- 4) 佐藤敏夫「レジャーの神学」新教出版社, 1988
- 5) 稲垣良典「恵みの時」東京創元社, 1988
- 6) 松田義幸編「ゆとりについて」ヨゼフ・ピーパー
のレジャー哲学をめぐって 誠文堂新光社, 1987
- 7) 松田義幸「現代余暇の社会学」誠文堂新光社, 1981
- 8) ヨゼフ・ピーパー「余暇と祝祭」講談社学術文庫,
1988
- 9) James F. Murphy 「Concepts of Leisure」 Philo-
sophical Implications Prentice-Hall, Inc 1974
- 10) Aristotle 「Nicomachean Ethics」 Loeb Classical
Library
Harvard-Heinemann 1975
- 11) Aristotle 「Politics」 Loeb Classical Library
Harvard-Heinemann 1977
- 12) I. Moutanell: (藤深道郎訳) 「ローマの歴史」中央
公論社1976